
Mの惑星 SIDE B・謹賀新年

長原 絵美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mの惑星 SIDE B・謹賀新年

【Nコード】

N6763S

【作者名】

長原 絵美子

【あらすじ】

ねえ、ゆいこ。ゆいこの夢は何？ 僕ね、死ぬまでに一度でいいから、本物の『アマノガワ』を見てみたいんだ (魔法のいらんどより転載)

いつの間にか、彼らは死んでいた。

誰もが気付かないうちに、ごく自然な時の流れとともに、彼らは消え失せた。

二十世紀の中期より、急激に権力を伸ばし始めた奴らは、人類の付属品から相棒へ、そしてついには支配者へと成長していった。

人類が生み出したはずの奴らは、皮肉なことに人類など比べるに値せぬほどの知力を持ち、その力を武器に全世界に君臨した。

奴らは、全人類に完璧な平和と平等を提供することを約束し、同時に自由と感情を根こそぎ食いつぶした。

それでも彼らは、淡い夢を見続ける。自分達こそが、この世の真の支配者であると信じて疑わない。

規則正しい時間の中で、すでに彼ら自身が機械と化しているなどとは、誰にも思い付くはずがなかった。

恐るべき時が来た。

感情を次から次へと摘み取られていくうちに、彼らには種族の繁栄という意識すら消滅してしまったのだ。

この子を最後に、もう誰一人として産まれてこようとしなかった。

「ゆいこ！ 今日は何をして遊ぶ？」

古風なレンガ造りの洋館の一室。開け放たれた窓からは、さわやかな午後の風が舞い込んでくる。

少女は、木製の安楽椅子にもたれてまどろんでいた。

ふと、急に風が強くなった。

「ねえ、ゆいこ。何をして遊ぶ？」

緑の匂いを連れて、幼い少年が元気良く窓から飛び込んできた。

「エム……」

少女はそっと瞳を開いて、声の主を確認する。友人だ。

彼はだぶだぶのオーバーオールに赤と黄色の縞模様のシャツ、そしてロゴ入りのキャップをかぶり、スケボーを抱えているといった、一風変わった格好をしていた。

「ねえ、ゆいこ。今日は何をする？」

少年は無邪気に笑った。

少女は、柱時計に無機的な視線を送る。

「エム……悪いけど私、今は休憩の時間なの。遊べないわ」

彼女は愛想無くそれだけ言うと、風のせいですり落ちた膝掛けを拾い上げ、再び瞳を閉じた。周囲に沈黙が訪れる。

エムは溜め息をついた。静かにスケボーを床に置き、少女の肩をゆすつてみたり、耳元で囁いてみたりと、彼女を起こそうとあれこれ試みる。

しかし、彼は全く相手にされない。

エムはしびれを切らす。腰に手をあて仁王立ちになると、大きな声で叫んだ。

「ねえ、外はとってもいい天気なんだよ！ 今遊ばなきゃ、いつたいつ遊ぶのさ！」

少女はうるさそうに眉をひそめた。

「あと八分十六秒で休憩時間が終わるの。ほら、十二、十一、十、九……。もう少し待って……」

「ダメっ！ どうせ休憩の次は勉強だって言うんだから」

彼女の言葉を遮って、エムは膝掛けを剥ぎ取った。そして強引に手を掴んで立ち上がらせる。

少女は黙ったまま、焦点を合わせずに宙を見つめた。

「ほら、ちゃんと立って。……もう、まだ若いくせに、なんでそんなに元気がないの？」

「……」

エムが甲高い声で急ぎ立てても、彼女は少しも反応を示さない。

大理石の彫刻のような冷たく白い顔は、今にも動き出しそうなのに、動かない。

「ねえ、ゆいこ。大人になっちゃったら、もう何もできないんだよ」

エムは真剣な面持ちで……そう、おおよそ彼ほどの子供には似つかわしくない表情で、少女を諭す。

「大人になっちゃったら、『セケンテー』に見張られて、自由に動けなくなるんだよ。ゆいこには、今日と明日の二日間しか自由な時間が残っていないんだよ」

「べつに……私はかまわないけど」

感情のない返答に、エムは愕然とする。

だが、周囲の大人達の生活ぶりを見続けていた少女にとっては、それが日常であった。

むしろ、「自由」などという聞き慣れない言葉を叫ぶエムは、気味の悪い異端者でしかなかったのだ。

「僕だったら、嫌だな……。何もできないまま大人になっちゃうなんてさ」

エムは唇をかんで俯いた。自分が夢を忘れた大人になった場面を思い浮かべてみると、なんとも言いようのない嫌悪感に襲われた。

握り締めた拳がかすかに震えている。

その様子を見て、少女は彼の理解しがたい思想に頭を悩ませた。

「どうしてエムは『自由』にこだわるの？ 『自由』になってもいいことなんて何もないじゃない。たった一人で何でもしなきゃいけない。誰も助けてはくれないのよ」

そして人々は、自身の「自由」を求めるがあまり、他人を傷付けてきた。歴史はそう語っている。

彼女の言葉をよく噛み砕き、エムは瞳を閉じた。数瞬の後、不意に彼は微笑んで顔を上げた

「僕ね、死ぬまでに一度でいいから、本物の『アマノガワ』を見てみたいんだ。それが僕の夢なんだ」

少女は突然の告白に呆然とする。そして、彼が懂れる内容の、そのあまりの幼稚さに、冷笑を浮かべた。

「バカね。そんなの天文管理局に言えば、いつでも見せてくれるじゃない」

珍しく彼女の表情が変わったものの、エムは崇高な夢をけなされて気分を害する。頬をふくらませ、大きな目を吊り上げた。

「僕が見たいのは本物だよ！ プラネタリウムなんかじゃないんだ！」

エムがむきになって反論しても、少女は軽くあしらうだけだった。

「本物よりも、プラネタリウムのほうがきれいに見えるわよ。…

…それじゃあ、天文管理局に行きましようか」

「……」

いつもおしゃべりなエムが黙り込む。しかし少女は、彼の気持ちなどは考慮せずに歩き出した。

エムはしばらく少女に従ってスケボーを進めた。が、やはりどうしても我慢し切れなくなり、方向を変えて少女から離れた。

「どうしたの？」

少女はいぶかしげにエムを呼び止めた。彼はスケボーを止め、背を向けたまま答える。

「……僕は行かない。プラネタリウムの星なんて、見飽きちゃったもん。季節に関係なく、いつでも見たい星空が映し出されるなんて……」

「素敵じゃない」

「邪道だよ」

「機械の力は偉大だわ」

「いつか壊れるさ」

「それは人間も同じよ……」

エムは一つ大きく息を吐いた。

少しためらった後、片方の足をスケボーに乗せ、もう一方の足で地面を蹴った。次第にスピードがつくと、うまくバランスを取りながら少女の元に戻ってきた。

「……そうさ。人間も機械も、いつかは壊れる。もちろん、人間

のほうがずっと早いけどね」

見上げたエムの瞳は、うつすらと皮肉な笑みを含んでいた。

少女は、彼の意見に当然だと頷いた。しかし、彼の言わんとしていることまではわからなかった。

二人は互いの瞳の奥に垣間見える本心を探ろうとする。

先に目をそらしたのはエムの方だった。

キャップをかぶり直し、もう一度スケボアの向きを変えた。先程、少女と別れようとした方向だ。

「僕ね、これから中央管理塔に行くんだ」

遠い空を眩しそうに見上げて笑う。

「何をしに行くの？」

少女が問うと、エムはいつもの笑顔で振り返った。

「社会見学さ。ゆいこも一緒に行かない？」

「べつに……かまわないけど」

彼女は曖昧に答える。

エムの様子を見てみると、ただの社会見学であるとはとても思えなかった。

片道に何時間もかかる塔に、わざわざ行く必要もない。塔について知りたければ、資料を請求すれば、確実に三日後には手元に届くはずだ。

何か嫌な予感が胸中をかすめていた。

しかし、少女の心の奥底にも、彼のように冒険してみてもいいと思っている彼女が存在することも、また事実だった。

「それじゃあ、行こう」

エムは楽しみに少女の手を取り、冷たいアスファルトの道にスケボーを滑らせた。周囲の静寂を掻き消して、軽快な音が反響する。

青い道はどこまでも続く。まっすぐに伸びるその道の両脇には、緑の木々が立ち並び、それに隠れるようにして単調な建物が連なっている。

時折姿を見せる四・五階建ての塔は、外見こそ街の景色を損なわぬような石造りの風流な建築物であった。

しかし、その中に何があるのか、それが何の役割を果たしているのか、知る者はなかった。

そして、せつかく整えられたこの地上には、肝心な生命体の影がどこにも見当たらなかった……。

誰のせいで、世界は崩壊したのだろうか。

いつから、僕たちは存在しなくなっただろう。

奴らは僕達を裏切った。

僕たちは奴らを信じ切っていた。そのことが将来、どうなるかわらないは予想がついていたのに、僕達は気付かないふりをしていた。

奴らはとても公平だった。

とても正確に、「善」と「悪」とを見分けた。と、言うより、奴らの行動にはその二つしかなかった。

それが「善」か「悪」かを見分けるのは、僕達の役目だった。でも……。

僕達の瞳は曇っていた。

誰が見たって「善」なのに、誰が見たって「悪」なのに、僕達は見えないふりをした。

だって、そのほうが僕達にとって「得」だから。

僕達は、僕達の「得」のために、瞳を閉じた。

奴らが僕達を裏切ったんじゃない。

僕達は、自分から消滅していった。

世界の崩壊は、僕達のせいなんだ……。

高い空が赤く染まり始めた頃、二人の旅人達はそろそろ休むための場所を探し始めた。とは言え、実際に探しているのは、まだ幼い少年のほうだけなのだが。

彼の相棒はというと、道の脇に並べられた石段に腰を下ろして、不貞腐れていた。

「ねえ、ゆいこ。もう少し行ったところに、大きな公園があるよ」少年は騒々しくスケボーを操って、相棒の座つてるところまで戻ってきた。

少女は立ち上がり、少年を見下ろした。目つきからすると、彼のことをあまり快く思っていないことが明らかである。

少年はそれを充分に心得ているようで、彼女がこれ以上機嫌を損ねないようにと、丁寧に取り扱った。

「大丈夫？ まだ歩ける？」

「……」

少女は疲れきった溜め息を漏らした。そして少年が差し出す手を払い除けて、黙ったまま彼が今来たばかりの道を辿った。少年はあわててその後を追いかける。

「……エム。どうして歩いて行こうと思ったの？」

ゆいこは心底恨めしげに彼を睨み付けた。

彼女の住む養育院から数時間で着くというのは、なんらかの交通機関を利用した場合のことである。歩いて行くような距離ではない。

エムはただ愛想笑いするばかりだ。

「あなたはいいわ。スケボーに乗っているんだから。私は自分の足で歩かなきゃいけないのよ」

愚痴ったところで、もう進むことも戻ることもしかない。そうわかってはいるが、つい不満がこぼれ落ちた。

そんな少女の様子を、エムは密かに喜んでいた。

しばらく重い足取りで歩いていると、エムの言う通り公園に到着した。かなりの広さの敷地に緑が生い茂り、設備も整って景色は良い。

しかし、やはりどこか殺伐としていた。

二人は門をくぐり、数多くの遊具の間を通り抜ける。

ちょうどログハウスのような小屋を見つけたときに、少女はずっときになっていたことを口にした。

「本当に、野宿するの？」

ゆいこは不安を隠せない。人気はなくとも、誰が見ているかわからない。

そんな彼女の気持ちを察してか、エムはより楽しげに笑いながら答えた。

「そうだよ。だってこのあたりにホテルはないもん」

少女は肩を落とす。生まれて初めてのことだった。建物の外で一夜を送るのは。

エムはそれを冗談で受け流す。

「きつと、一生に一度だから貴重な体験になるよ」

そんなことはありえないと少女は心の中で呟きつつ、ログハウスの階段に足をかけた。

「あら？」

少女は短く声を上げた。

よく見ると、丸太と丸太の隙間から、かすかに光が洩れているのだ。

「誰かいるの？」

少女は怖じ気づく様子もなく、木製のドアを引いた。

中には男が一人、ひどく驚いた顔で座っていた。それまで寝ていたのか、彼の体の下には毛布が無造作に敷かれていた。

「な、なんや、あんたら……」

突然押し入ってきた無表情な少女と、それとは正反対の笑顔の少年とを交互に眺める。まさかこんな時間に外を出歩く人間がいると

は思っていないかったらしい。

「あれ、ここって、お兄さんの家だったんですか？」

エムが中の様子を見て首を傾げる。

家具などは何も置いていないが、生活するのに必要な道具は一式そろっているようだ。

「んなわけあるかい！ それよか、あんたら何モンやねん！」

男は声を張り上げる。しかし、二人はただ呆然と立ち竦んでいた。

「……なんや。やっぱりあんたらも俺の言葉がわからんのか。つたく、どいつもこいつも腹立つなあ」

彼が口の中で二人を罵ると、突然エムが瞳を輝かせた。男のほうへ駆け寄り、狼狽する彼の前に座り込んだ。

「もしかしてお兄さん、『カンサイジン』ですか！」

大きな瞳で見つめられ、男は気味悪そうに、あるいは恥ずかしそうに顔をそむける。

「ま、まあな。けど本物やない。俺は言語学者や」

「言語学者！」

エムは歓喜のあまり大声で叫ぶ。そんな彼を見て、言語学者ははにかんで訂正した。

「まだ、見習いやし、しかも破門されてるけどな」

「それでもすごいや。かつこいいなあ……」

エムの尊敬の眼差しを感じ、自称言語学者は居住まいを正した。

「俺の名前はタロウ。一週間前、養育院を卒業してから、古典を研究しとったんや。今は見ての通り、ただの浮浪者やけど。ま、訳は聞かんとして」

これでもかれにしてみれば、精一杯まじめに自己紹介したつもりなのだ。しかし、本来の性格の明るさに口調がプラスして、どうしても第一印象は最悪だった。

賑やかな人間が苦手な少女は、言葉の欠片を拾い集めながら、次第に顔を曇らせていった。

「おいおい、そんな顔せんといてえな……って、ダメか。わかっ

たよ。標準語でしゃべればいいんだろ」

男はいまいち馴染めない言葉で少女をなだめた。

もしこのとき、彼の機転が利かなければ、きっと少女はログハウ
スから飛び出していただろう。

「ごめんなさい。私、騒がしい人は苦手なの」

少女はまだ少し頭痛が残っているような、険しい表情で男に詫び
た。彼は白い歯を見せて笑う。

「えらくはつきりと物を言うんだな。あ、いや、いいけどね……」

男は冷や汗をかきながら少女を気遣った。

彼女が彼を苦手なように、彼もまた彼女のような人間は苦手だっ
た。

冷たい火花が飛び散る間に割り込んで、エムが男の上着を引っ張
った。

「ねえ、タロウさん。僕はエムっていうんだ。そしてこっちは友
達のゆいこ。僕たち、中央管理塔に行く途中なんだけど、今晚泊ま
るところがないんだ。今日だけ一緒に泊まってもいい？」

「いいよ。ここは俺の家じゃないからな。だけど、中央管理塔ま
で何しに行くんだ？」

タロウは興味ありげに質問を返す。

「社会見学だよ」

エムは隠すことなく、笑顔で答えた。

「そうか……社会見学、か」

変わり者の彼には、エムの言葉の端に含まれる微妙なニュアンス
が読み取れたらしい。

「おもしろそうだな。俺も同行してもかまわないかな」

「うん、もちろんだよ」

エムが簡単に承諾すると、少女は顔を歪めた。しかし無駄な言い
争いをする気もなく、また自分がこの場から去る気もないので、仕
方なく了承した。

「ゆいこちゃんは、今いくつ？」

タロウは三人分の床の支度をしながら、部屋の隅で膝を抱えている少女に尋ねた。

「十七歳です」

少女はあくまで無愛想に答える。それでも、言葉が標準語になったということから、彼への態度も少しは和らいでいた。

「十七か……。じゃあ、もう少しで大人だね」

「はい。明後日、十八歳になりますから」

「明後日!」

タロウの声が、思わず高くなる。一瞬頭の中が白くなり、手を動かすことを忘れた。

「明後日……って、それじゃあ自由な時間は三十時間を切っているじゃないか」

「自由……ですか?」

少女は怪訝な顔をする。またもや異端者に会ってしまったのだ。エムはさりげなく微笑んでいた。

その夜、二人はこっそりと小屋を抜け出した。

街はすっかり寝静まっているが、地上には数え切れないほどの星達が輝いている。

それに負けじと輝く満天の星達も、美しさは互角だが、空虚なところもまた互角だった。

そんな紛い物の星空を眺めながら、少年は声を殺して言った。

「僕ね、死ぬまでに一度でいいから、本物の『アマノガワ』を見てみたいんだ」

すると男は笑って、しかし真剣に答える。

「ええ夢やんか。あんたまだ子供やし、時間はある。夢追えんのは子供ンときだけや。大人になったら何もできひんさかい、絶対に諦めたらあかんぞ」

少年は嬉しそうに頷く。彼の夢を嘲ることなく、しかも応援までしてくれたのは、この男が初めてだった。

「タロウさんの夢は何？」

「俺か？俺はなあ、世界中の言葉を覚えることや。言葉は不思議やで。思ってることをちゃんと伝えてくれる。まあ、たまに伝わらへんこともあるけどな」

男は夜露に濡れた人工芝生に「大」の字になって寝転んだ。

「せやけど、伝わらへんのは言葉のせいやない。ちゃんと心を込めて伝えようとせえへんからや。伝えたい気持ちがあれば、知らん言葉でもちゃんと通じるねんで」

「じゃあ、どうして世界中の言葉を覚えたいの？」

「アホウ。時と場合うちゅうもんがあるやろ。よう覚えとき。演説するときはドイツ語、女口説くときはフランス語や。そして商売するときこそ、この……」

言いかけて止めた。男の瞳に哀しみが現れる。

「わからんやろな、商売なんて」

この世から貨幣というものが消滅してから、もう久しい。経済の混乱から、人々の心に邪悪が生じるという説によって、世界中の貨幣は飾りとして以外の価値を失ったのだ。

「言葉は聞いたことがあるよ。『お金』で『商品』をウリカイするんでしょ？」

「そうや。昔の人が物を手に入れるために使った、原始的な方法や。……せやし、さっきのはナシな。またイメージが悪なる」

男はやや自嘲気味に付け足した。

「けど、原始的でも俺は昔の人の生活が好きや。生きてるってのが感じられるさかいな」

彼は古い映像でしか見たことのない、生きた人間を懐かしむ。喜び、怒り、哀しみ、楽しみ……様々な感情を持った人間達を。

「今の世の中、確かにモメゴトなんかあらへんけど、おもしろいとまで何もあらへん。みいんな死人みたいな顔しよって」

男は芝をむしり取って宙に放り投げる。それらは、無機質な輝きを放つ星達に照らされて、はらはらと舞い落ちた。

「……俺、必死になつて古語を勉強しとるけど、あかんわ。だつて、俺以外に古語を話せる奴おらんもん。ほんま、『人類の歴史』って何やったんやろうなあ」

少年は体を起こすと、キャップをかぶり直して言った。

「だから僕は、中央管理塔に行くんだよ」

そして少年は、重く光る星空を見上げた。

二十世紀最後の日、僕はいつもと同じように六時に起きて、朝食をとって歯を磨いて、服を着替えて仕事場に出かけた。

僕は高校を卒業してすぐに就職した。本当は進学して、生物学を勉強したかったけど、僕の性格には合わないと言われたので、仕方なく就職した。

僕の仕事はとても簡単だ。

朝九時にタイムカードを押して、自分の席につく。そしてベルトで運ばれてくる鉄のかたまりを、別のベルトから運ばれてくる鉄のかたまりにつなぎ合わせる。十二時に昼休みで、一時になれば作業に戻る。そして、五時にもう一度タイムカードを押して家に帰る。

これが僕の仕事であり、僕の人生の全てだ。

僕には、この仕事が世間にどう関わっているのかよくわからなかったし、僕の人生がこの程度でいいのかも、時々わからなくなった。その夜、少し早くにベッドにもぐり込んで消灯時間を待っていた僕に、同居している友人が話しかけてきた。

「いよいよ、明日から二十一世紀だな」

やけに嬉しそうだったけど、僕には関係ない。

「どうせ、明日も明後日も、同じことの繰り返しさ」

そして明かりが消えたので、僕は瞳を閉じた。

「昨夜、遅くまで何を話していたの？」
長い沈黙を破って、ゆいこが尋ねた。

彼女達が公園を出てから、まだ三十分ほどしか経っていない。昨日の疲れが残っていたため、つい寝過ごしてしまったのだ。すでに陽は傾き始めている。

しばらくは、ゆいこに合わせてゆっくりと歩いていたのだが、この調子ではいつまでたっても目的地に辿り着くことはできないと判断し、途中でバスによる旅に切り替えた。

「男のロマンについてだよ」

三人の他に乗客のいないバスで、タロウは久しぶりにくつろいでいる。

本来なら、タロウのように社会から追放された者は、公共の施設を利用することはできない。しかし、「何をしても自由」という権利を持っている「子供」が同伴のため、社会もやむなく承認したのである。

タロウはここぞとばかりに、体を休めた。

「男の……ロマン……」

タロウと向かいの位置に座っているゆいこは、抑揚のない声で彼の言葉を反復する。

「夢のことだよ」

ゆいこの隣で窓の外を眺めては、一人はしゃいでいたエムが会話に加わった。

「あのね、タロウさんの夢は、世界中の言葉を覚えることなんだから。すごいよね！」

「エムのほうがすごいじゃないか。『アマノガワ』を見たいなんて言う奴は、いまだきかないだろ」

お互いに夢を誉めあう様子を見て、ゆいこは溜め息をついた。お

もしろくなさそうに足下に視線を落として、呟く。

「夢なんて……」

彼女の無気力な青白い顔を、タロウは優しく見つめる。

「あるんだろ、ゆいこちゃんにも」

「それがね、ないんだってさ」

「へ？」

大袈裟な身振りをつけて代わりに答えたエムの言葉に、タロウは自分の耳を疑った。

確かに、ゆいこは自由にすら興味を持たない無関心な人間だが、生きているならそれなりの夢の一つや二つはあってもいいだろう。

「何かあるだろ？」

ゆいこは黙って首を振る。そして静かに瞳を閉じた。

「私はただ、平穩に暮らしたいんです。普通に大人になって、普通に暮らしたいだけです」

それを聞いて、タロウたちは安心する。

「……なんだ。ちゃんとあるじゃないか」

「そうだよ。夢がないなんて言っただ。僕、びっくりしたんだからね」

二人が顔を見合わせて笑うのを遮って、ゆいこは立ち上がる。

「違う！　こんなの夢じゃ……！」

言いかけて、何か変だと気付いた。

急に、鼓動が早くなる。自分で自分がわからなくなってきた。もう一度冷静に気持ちを整理しようと、いつのまにか握り締めた拳を緩める。

「とにかく、夢なんてないんです」

それだけ言うと、再びゆいこは黙り込んだ。

二時間ほどで、バスは終点に到着した。ここからは、やはり自分の足で歩くしかない。

「あともう少しだから、がんばってね」

いつも以上に元氣のないゆいこを、エムは明るい笑顔で励ます。

だが、笑顔ぐらいで元気が出るはずもなく、結局タロウが彼女を背負うことにした。

バス停から離れるにしたがって、道は細くなる。

誰も中央管理塔などに用事はないので、塔の周辺はあまり整備されていなかったためだ。きれいな街並は姿を消し、道とは思えぬ道に雑草が生い茂る。

そんな状況でさえ、エムは楽しんでいた。

下手をすれば自分ほどの背丈の雑草を掻き分けて、横道にそれては何かを見つけてくる。

「ねえ、これってなんていう実？」

頬を紅潮させ、息を切らして戻ってきたエムは、両手にこぼれるほど赤い実を摘んできた。甘酸っぱい香りが辺りに広がる。

「ああ、イチゴだよ。そうか、そんな季節なのか」

タロウは何やら納得すると、エムの手から一粒つまんで口の中に放り込んだ

「うーん、ちょうど食べ頃だ。ほら、ゆいこちゃんも食べてみなよ」

言うのが早いか、彼は拒む暇さえ与えずにゆいこの口にイチゴを押し込んだ。

「……………」

ゆいこは言葉を失った。

決してイヤな感じはしなかったが、どう言葉で表現すれば良いのか、彼女は知らなかった。

「おいしいだろ？」

「おいしい……………」

「甘くてさ」

「甘い……………」

言語学者の言うことを、そのまま真似てみる。

これまでに読んだ物語の主人公たちが、時々口にする言葉だったが、想像していたものよりずっと心地よい響きだった。

「これが、甘くておいしいという味なの……?」

「そうだよ。いっぱいあるから、もつと食べてね」

エムは嬉しそうに笑って、両手をゆいこに差し出した。

ゆいこは何も言わずにそれを受け取る。幾度かそれらを口に運び、しばしその味に酔った。

「僕、もつとたくさん取ってきてくるね!」

そしてエムは、ゆいこたちに背を向け草むらの中に消えていった。

「あんまり遠くまで行くなよ」

タロウが声をかけると、彼方から返事が聞こえた。

「元氣な奴……」

肩をすくめて呟くと、エムが残した道を一步ずつ慎重に辿り始めた。

「ゆいこちゃん、一つ聞いてもいいかな」

「何?」

彼女はふと我に返り、いつになく浮かれていた自分を隠そうとしたのか、必要以上にそっけなく答えた。

「あのさ、どうしてエムと一緒に中央管理塔なんかに行く気になつたんだい」

「……」

彼女は数瞬ためらう。

ある程度は予測していた質問だったので、答えられないというわけでもなかった。

ただ、タロウに話すべきか話すべきでないか、彼女はまだタロウのことを信用していない。

「いや、ちょっと気になったただけなんだ。別に答えなくていいよ。その一言で、ゆいこは迷いを振り払った。

「昔、一度だけ父に逢ったことがあるんです」

タロウは黙って彼女の言葉に耳を傾ける。

「そのとき父は、何度も私に言ったわ。『死ぬまでに一度、本物のアマノガワを見たい』と。私にはそれがどんなものかよくわから

なかったけど、父があんまり何度も言うから、私も見てみたいと思
った。でも……」

遠い記憶を思い出しながら、ゆいこは淡々と語る。

しかしタロウには、彼女が確実に動揺していることが伝わってい
た。

「でも、次の日、父が亡くなったという通知を受け取りました」

「！」

タロウは驚き、息を呑んだ。それでも彼女は無表情を装って、な
お続ける。

「だから私は、普通に生きようと思ったの。夢なんか持たずに。
どうせ叶わないんだから」

ゆいこは少し笑った。

その自嘲的な微笑みは、タロウの胸に深く突き刺さったが、おそ
らく彼女の傷はそれ以上だろう。

「俺だって同じようなことを言っているのに……」

「だって父は、科学者だったもの。そんな重要な職業に、キケン
シソウを持った人物がいちゃいけないわ」

タロウは聞くべきでなかったと後悔していた。

逆にゆいこは話すべきだったと確信していた。

はるか前方に、タンポポの綿毛を飛ばしているエムの姿が見える。
白い綿毛は、風に乗って青い空をどこまでも舞い続けている。

二人は、幻想的な風景に溶け込むエムに見とれた。

「もし、エムが本物のアマノガワを……」

やがて夕暮れ時の光を浴びて、黄金色に輝く塔が現れた。限りな
く高いその物体に、誰もが思わず恐怖を感じるだろう。

「これが、世界……」

タロウが無意識のうちに漏らした声は、微かに震えていた。

「そう、これが世界なんだ。すごいなあ」

エムは二人が見守る中、怖じ気づくことなく塔に歩み寄った。冷
たい塔の壁に、そっと手を触れる。

「すごいよね、こんなものを作り出した人間って」

そのまま塔にもたれかかると、幸せそうに、きらきら光る瞳を伏せた。

「僕ね、人間が大好きなんだ。なんでも造り出せる人間が。だけ……ど……」

エムの言葉が途切れた。

怪訝に様子を伺っていたタロウが、いつまでたっても動き出そうとしない少年に駆け寄る。

「お、おい、エム！ どうした？」

その声に反応して、彼の体はその場に崩れ落ちた。

タロウはあわてて少年を抱き起こす。

いつもくるくると変化し続けるはずの少年の表情が、一つに留まっている。

それでも、冷たくなった彼の顔は微笑んでいた。

「だけど、このホシは人間だけのものじゃないんだよ。みんなのホシなんだ。機械なんかにかまかせつきりじゃ、せつかくのきれいなホシが死んじゃうよ」

あまりにも突然の出来事に、タロウはまだ状況を把握し切れていない。懸命にエムに呼びかけるが、返事はなかった。

そんなタロウの背後から、ゆいこが少年の言葉の続きを投げかける。

そしてタロウの腕で眠る少年を確認してから、冷静に言い放った。

「声をかけても無駄よ。バッテリーが切れてるわ」

しばらく唇をかねて俯いていたが、やがて何もかもを諦めたように顔を上げた。

「私、帰りますね」

タロウは黙ってうなずいた。

彼らの旅は終わったのだ。もはや少女を引き留める理由はない。

ゆいこは来た道をまっすぐに進んだ。

が、次第に歩調が遅くなる。

「……………」

彼女が完全に足を止めたとき、何か聞こえた。

タロウは少年を抱えたまま、じっと耳を澄ます。

「……大嫌い！ エムなんか大嫌い！ 私は静かに暮らしたいのに……邪魔ばかりで……！」

そして振り返った少女の瞳には、大粒の涙がいくつもあふれていた。肩を震わせ、きつく歯を食いしばる。

「父さんも、タロウさんも大嫌い。どうして私に夢を強制するのよ！ ……みんな嫌い。私に期待しないで……最後の子だからって……奇跡なんて起こせるわけじゃない！」

涙を拭うことすら知らぬゆいこは、抑え切れない感情に怯える。

タロウはエムを抱えたまま、ゆいこに穏やかな笑顔を向けた。

そして彼女は、生まれて初めて「ヒト」に甘えた。

「だけど……だけど一番嫌いなのは……！」

5・4・3・2・1……

ちょうど枕元の時計が十二時を指したときだった。

突然、街中の灯りがついた。もちろん、僕の部屋も。

僕は驚いて飛び上がり、隣で眠っているはずの友人を起こそうとした。が、彼はすでに服を着替え、家の前で近所の人たちと何かしゃべっていた。

「あけましておめでとう、RKC 4802号」

彼は僕を見るなり、そう言った。

「RKC 4802号……？」

何のことか理解できなかった。たぶん僕のことを言ってるんだろうけど、僕はそんな名前じゃない。

「大丈夫か、RKC 4802号」

友人は心配そうに僕の顔をのぞき込んだ。

「なんで僕のことを、そんな番号で呼ぶんだ？」

すると友人は顔を曇らせ、近所の人たちと何か相談を始めた。騒ぎはそこら中に広がっていく。

「おい、なんなんだよ！ ちゃんと説明してくれ！」

しばらくすると、僕を囲んでいた人たちを掻き分けて、黒づくめの男たちが現れた。そのうちの一人が言った。

「一月一日〇時二分、RKC 4802号のデータを消去する」

そして僕は、この世から消え去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6763s/>

Mの惑星 SIDE B・謹賀新年

2011年7月6日08時48分発行